

西アジアの馬面

巽 善信

West Asian Horse Forehead Ornaments of 9th–6th Centuries B.C.

Yoshinobu TATSUMI

前9世紀から前6世紀における西アジアの馬面を形態分類すると、大きくA・Bの2グループに分かれる。Aグループは台形を基本とした形態で、概して幅は比較的広い。Bグループは細長い形態をなしている点で共通しており、概して細く、特に上端部は極端に狭い。年代的にはAグループが先行して出現しており、年代的に前後すると言えそうである。分布範囲にも差違が認められる。Aグループは地域的には北西部にほぼ限定されているのに対し、Bグループは比較的広い範囲で用いられているのが分かる。筆者はこの両グループの形態的な差違は、馬面を用いる意味に変化が起きたために生じたのではないかと考える。

キーワード：西アジア、鉄器時代、馬面、形態、差違

West Asian horse forehead ornaments of the 9th–6th centuries B.C. can be classified in two groups termed A and B. The A group is a form based on a trapezoid; its width is generally comparatively wide. The B group has a long and slender form, and its upper end is extremely narrow. In age, the A group precedes the B group. There is also a difference in range between both groups. Although the A group was limited mostly to the northwestern part, the B group was used over a comparatively large range. The author thinks that the difference in form between two groups arose because of changes that occurred in the meaning of horse forehead ornaments.

Key-words : West Asia, Iron Age, horse forehead ornament, form, difference

はじめに

前9世紀から前6世紀頃にかけての西アジアの馬面を、主にその形態から考察することにする。まず形態分類をし、その簡単な特徴を述べる。さらにこれらが大きく2グループに分けられることを示し、その年代的位置づけを行う。そしてその変遷の意味するところを考えたい。

形態分類

実物あるいは馬像に表現されている馬面の形態を観察すると、幾つかに分類できる（巽 1995）。

1. 外反逆台形（図1）

上底が長く、下底が短い逆台形をなし、両サイドが外に反っている。この形態の馬面はウラルトゥの遺物にしか確認されていない。公表されているものは管見で8点あり、いずれも青銅製である。1～3本の稜線が打ち出して外縁部に廻らされているものが多い。神像や牡牛などの獣像、植物文等が毛彫りや打ち出しで描かれている。長さは25cm程度で、上部の幅は13～15cm程度である。上端部に3つ、

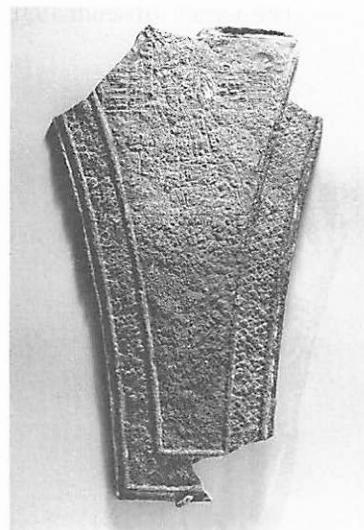


図1 天理参考館蔵青銅製神像馬面

下端部に3つ以内の小孔が穿たれ、一部にリングが残っている。本来はすべての孔に備わっていて、そのリングを通

して面繫に取り付けられていたと考えられる。すべてに神像が丹念に描かれている。特にウラルトゥの雷神テイシェバ (Teisheba) は好まれたようで5点に見られる。いずれも発掘出土例ではなく、年代が分かるのはウラルトゥ王イシュピイニ (Išpuini、前830~810年頃) の名が刻まれた1点のみである。

2. T字形 (図2参照)

上半部が大きく左右に張り出したT字形をなす。上半部は中央部で一旦くびれていて、さらに上下に分かれている。その上部の四端は丸みを持つが、下部の四端は角張っている。この形態の馬面もウラルトゥの遺物にしか確認されて

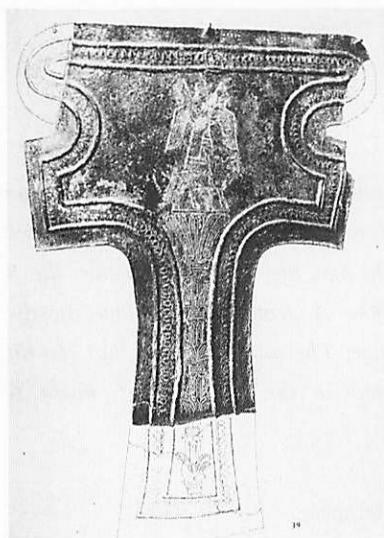


図2 青銅製T字形馬面
(The Israel Museum 1991)

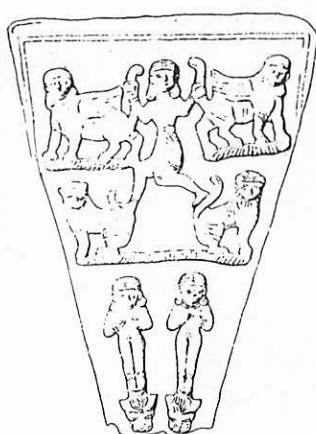
いない。すべて青銅製である。輪郭に添って二本の稜線を、打ち出しで外縁部に廻らせている。長さは28~30cm程度で、上部の幅は25cm程度である。面繫に取り付けるために、上端部に3つ、角張った張出し下部の両端に1つずつ、下端部中央に1つ、小孔を穿いている。公表されているものは管見で9点あり、そのうちウラルトゥの王名が刻まれていて年代の分かるものは7点である。すなわちメヌア (Menua、前810~786年頃) が3点、サルドゥル II世 (Sarduri II、前764~735年頃) が4点である。ウラルトゥのテイシェバ神が丹念に毛彫されているものが1点ある。他は稜線以外に文様は施されていないが、括れた上半部自体が有翼円盤の両翼を表現しているように見える。

3. 逆台形

ハマ (Hama) を初め、北シリアの遺跡から出土する象牙製品に良く見られるもので、シンジルリ (Senjirli) の石彫馬頭像 (図3-1) を根拠に R.D.バーネットが馬面と同定した (Barnett 1957)。上底が長く、下底が短い逆台形をなす。長さは15~20cm程度、上部の幅は8~15cm程度。神像や獣像などが描かれている。裸体描写されたシリア土着の女神アスタルテ (Astarte) は、題材に良く用いられている。シンジルリ石彫馬頭像の馬面にも裸体女神が描かれており、これもアスタルテ神を表現しているのかもしれない。面繫に装着するための小孔が、上下端に連ねて穿たれている。象牙製だけではなく青銅製のものもある。タイナト (Tell Tainet、前8世紀末~前7世紀前半) 出土例がそれで、北シリア域では初めての金属製逆台形馬面 (図3-2) となる。文様は上下二段に構成されている。上段は2匹のライオンの腰に立ち、両手で2匹のスフィンクスの尻尾をつかんでいる神像で、下段はライオンの頭に立つ2体の裸体女神像



1 石彫馬頭像
(Kantor 1962)



2 タイナト出土例
(Kantor 1962)



3 ニムルド出土例
(Barnett 1957)

図3 逆台形馬面

である。長さ20.6cm、上部の幅15.2cm。北シリア域以外では、象牙製品はアッシリアのニムルド(Nimrud、前8世紀頃)から出土している(図3-3)。青銅製品はゴルディオン(Gordion、前8世紀末)、ミレトス(Miletos、前7世紀)から出土している。ハマとニムルドの出土例から判断して、象牙製品の年代は前9世紀以降で、サルゴンII世期(Sargon II、前722~705年頃)より下ることはないと考えられている。したがってこの逆台形馬面は前9、8世紀が最盛期で、前7世紀前半頃まで残ったと考えられる。

4. 台形

ハッサンル(Hasanlu) IVB層より青銅製馬面が2点出土している。細長い台形を基本とした形態をなしている。そのうち1点は上端部は欠失しているが、下端部には5つ、両側中央部には1つずつの小孔が穿たれている(図4参照)。この馬面は鉄製轡と面繫に取り付けられていた青銅製金具とともに出土している。青銅製金具は中央部に小突起のある円形金具が3点と多数の双葉形飾金具からなる。小さめの円形金具の2点は位置から判断して、額革と頬革を連結する辻金具である。もう1つの大きい円形金具は額革のほぼ中央にあり、本来ならば馬面があっても不思議ではない位置である。その円形金具から鼻先方向にやや下がつ

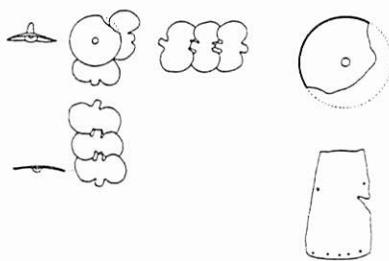


図4 ハッサンル出土例配置想定図
(Schauensee and Dyson 1983)

た位置に馬面が取り付けられていたようである¹⁾。もう1点の馬面は、左右に張り出した下端部に連なった小孔が穿たれ、上端部には輪状に折り返した吊手が取り付けられている²⁾。青銅製轡と青銅製円形金具とともに出土している。円形金具には中央部に小突起のある大きめのものが1点と、やや小さめのものが4点あり、それ以外はさらに小さくて中央突起のないもので、数も多い。出土状況から大きめの1点は額革に取り付けられ、やや小さめの4点は辻金具で、その他の小円形金具は面繫の飾金具であろう。前9世紀末頃。

5. 外反台形1

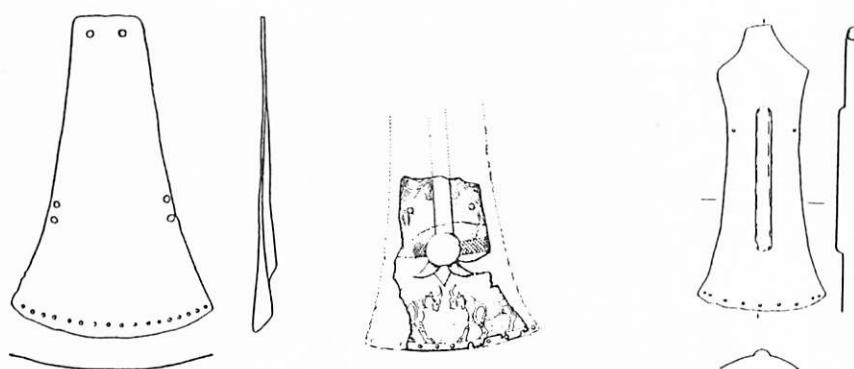
裾で広がるように両サイドが外反る、台形を基本とした形態である。概して細く、特に上端部である上底は極端に幅が狭い。三味線の撥を連想させる。次ぎに特徴的な4点を挙げておく。

(a) イラン、ババジャン(Baba Jan)出土例(図5-1)

青銅製。中央丘の馬葬墓より出土。裾で大きく広がる近似台形をなす。面繫に取り付けるために狭い上端部には2つ、両端の中央部には左右2つずつ小孔が穿たれている。弧を描く下端部にも輪郭に沿って17つ小孔がみられる。長さ25.3cm。馬葬墓は、中央丘を捨て東丘に移住した後に作られたもので、鉄製轡などの伴出遺物から判断して、年代は前8世紀後半から前7世紀に位置づけられる。

(b) テヘラン国立考古博物館蔵資料(図5-2)

銀製。ジヴィエ(Ziwiye)より出土。下半部しか残っていないが、ほぼ台形に近い形態をなしている。中央にはパルメット文が打ち出され、その下には2匹の向き合った牛像、横には立ち上がった獣像を線彫している。左右両側に1つずつ、下端部には連ねて小孔が穿たれている。現長13cm。R.ギルシュマン(Ghirshman)は前7世紀末頃に位置づけている(ギルシュマン1966:18)。



1 ババジャン出土例
(Goff 1969)

2 ジヴィエ出土例
(Özgen 1984)

3 天理参考館蔵品

図5 外反台形馬面(縮尺1/6)

(c) アシュモーレアン博物館蔵資料

青銅製。2点。イラン出土としか記述されていない。(a)と同様、裾で大きく広がる近似台形をなす。上端部に2つ、両端の中央部には左右1つずつ、弧を描く下端部には連ねて小孔を穿っている。中央部は縦方向に帯状に打ち出している。長さは21.2cm(登録番号1965-855)、23.5cm(登録番号1965-856)。

(d) ミュンヘン国立先史博物館蔵資料

銀製。1点。東アナトリア出土と伝えられている。細長い台形を基本とした形態で、上部は丸く、下部は裾に広がっている。中央部は帯状に打ち出している。上端部には別に作った輪を鋸留しており、吊手となっている。両サイド中央部には1つずつ、下端部には連ねて15個の小孔を穿っている。両サイドの小孔にはさらに巻で言えば引手のような金具が取り付けられている。

6. 外反台形2

上部で左右に三角形状に張り出している点が、外反台形1と異なる。

(a) 天理参考館蔵資料

所蔵しているのは3点で、いずれも青銅製である。伝イラン、ルリスタン地方出土。上部で左右に張り出し、逆に中央では一旦狭まり、裾で広がっている。上端部の突き出し部分を裏に折り返して輪状とし、吊手となっている。左右の張出し部分の下に1つずつ弧を描く下端部には連ねて、小孔を穿っている。中央部は縦方向に帯状に打ち出している。長さと最大幅はそれぞれ、23.2cm、9.1cm(登録番号38-450)、22.9cm、10cm(登録番号38-451、図5-3)、24.1cm、7.1cm(登録番号38-452)。厚みは1点(登録番号38-451)が1mmで、他2点は0.5mm程度しかない。強度を持たせるために帯状に打ち出しているとしても、防具としては薄すぎる。

(b) アグナ博物館蔵資料

青銅製。(a)と同様の形態をなす。ヴァン湖周辺出土とされている。長さ20.2cm。

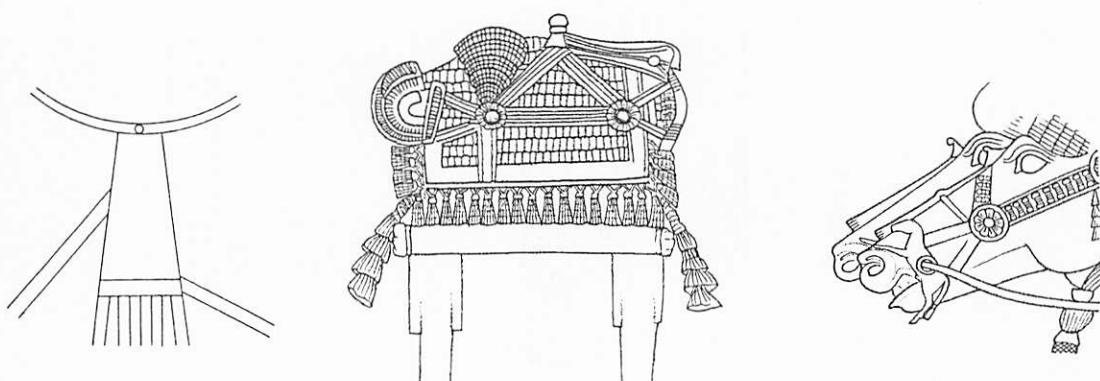
台形、外反台形では、像やレリーフに描かれているものも参考となる。トルコの東部にあるウラルトゥの遺跡、アルトゥンテペ(Altintepe)の3号墓より出土した青銅製馬頭像に細長い台形の馬面が描かれている(図6-1)。その描写によると、上端部を額草に繋げ、両サイドを革紐で斜め下方向に引っ張ることで固定している。そして下端部には房飾を取り付けている。伴出した青銅器に刻まれていた王名より、墓主はアルギシュティII世(Argisti II、前714~685年頃)と同時代の人物と考えられている。アッシリアレリーフにも前7世紀にはいると、ようやく見られるようになる。アッシュールバニパル(Assurbanipal、前668~630年頃)期に、細長い逆台形をなした馬面が描かれている(図6-2)。またセンナケリブ(Sennacherib、前704~681年頃)期にも馬面らしきものが見受けられる(図6-3)。

7. 細長い楕円形

台形ではなく、細長い長方形を基本とした形態をなす。全体に丸みのあるものが多いので楕円形とした。キプロスに多く見られる。実物例と馬像に描かれている例を挙げる。

(a) キプロス・サラミス(Salamis)2号墓出土例

墓室の前空間(dromos)で1両の戦車と2頭の馬が確認され、その頭部より青銅製馬面が1点ずつ、計2点(no.48、no.51)出土している。細長い楕円形を基本とした形態をなす。上下2つの部分からなり、蝶番でつながっている。上半部の上端部は輪状に折り返され吊手となっている。上半部中央部にはパピルス文、下半部では上部にロータス文、中央部に縦長帶状文、下部にパルメット文をそれぞれ打ち出している。2点とも長さ46cm。キプロス古拙期I期の初



1 アルトゥンテペ
(Özgen 1984)

2 アッシールバニパル
(Littauer and Crowel 1979)

3 センナケリブ
(Littauer and Crowel 1979)

図6 描写された馬面

頭に年代付けられている。

(b) キプロス・サラミス3号墓出土例

墓室の前空間で2頭だけ戦車2両が確認されたが、そのうち保存状況の良い2頭の頭部から青銅製馬面が1点ずつ、計2点 (no. 21とnos. 116&117 (図7-1)) 出土している。形態、構造は(a)とほぼ同様である。文様では下半部に透文が見られる点が異なる。またnos. 116&117の上部には嘴状の突起装飾が見られる。長さは55cm (no. 21)、48cm (nos. 116&117)。キプロス古拙期I期の末から同II期の初頭に年代付けられている。

(c) キプロス・サラミス47号墓出土例

47号墓は合葬墓で、8点の馬面が出土している。転てつなげられた2頭1対の馬が4対、墓室の前空間で確認された。そのうち最初の埋葬に関連する1対の頭部から、細長い楕円形を呈した金製馬面2点 (no. 82、no. 85 (図7-2)) が出土した。金製と言っても薄く、しかも周辺部は折り返されていることから、別の材質でできた本体に張り合わされていたものと考えられる。報告書では皮革製ではないかとしている。吊手がないことから、これまでの青銅製品とは装着方法は異なり、直接面繫に縫いつけたと考えられる。長さ41.5cm (no. 82)、37cm (no. 85)。追葬と関連する3対の頭部から青銅製が4点 (nos. 81&119、no. 111、no. 114 (図7-3)、no. 117 (図7-4))、象牙製が2点 (no. 89とno. 92)、計6点の馬面が出土している。青銅製馬面の形態、構造そして文様は(a)とほぼ同様である。長さは45cm (nos. 81&119)、44cm (no. 111)、45.5cm (no. 114)、45cm (no.

117)。最初の埋葬年代はキプロス古拙期I期初頭、追葬が行われたのは同期中頃と考えられている。

(d) キプロス・サラミス79号墓出土例

79号墓はさほど年代差なく追葬が行われた合葬墓である。墓室の前空間から出土した、最初の埋葬に関連する4頭だけ戦車から4点 (no. 165、nos. 178&179、no. 190、no. 198)、追葬時の2頭だけ戦車2両から3点 (no. 244、no. 320/13、no. 320/19)、計7点の青銅製馬面が出土した。形態、構造は(b)の青銅製馬面 nos. 116&117と同様である。最初の埋葬に関連する戦車の4点は、これまでのサラミス出土例とは施されている文様が若干異なり、上半部には獅子文、下半部には人物文を打ち出している。長さは50cm (no. 165)、50.5cm (nos. 178&179)、50cm (no. 190)、50cm (no. 198)、47cm (no. 244)、46.5cm (no. 320/13)、41.5cm (no. 320/19)。キプロス古拙期I期に年代付けられている。

キプロスからは前7世紀から前6世紀に位置づけられる、テラコッタ製もしくは石製の馬像が出土している (Crouwel and Tatton-Brown 1988)。馬面が描かれているものが少なくなく、参考となる。描かれている馬面は上記した実物と類似する細長い長方形を基本とした形態である。前6世紀に年代づけられるメニコ (Meniko) から出土したテラコッタ製馬像には額革から鼻革にかけて鼻梁部を覆う馬面が描かれており (図8)、この時代においても細長い形態をなす馬面が用いられていたことを示す。両サイドにペアとなった突起装飾が見られる点が、前7世紀の馬面とは異

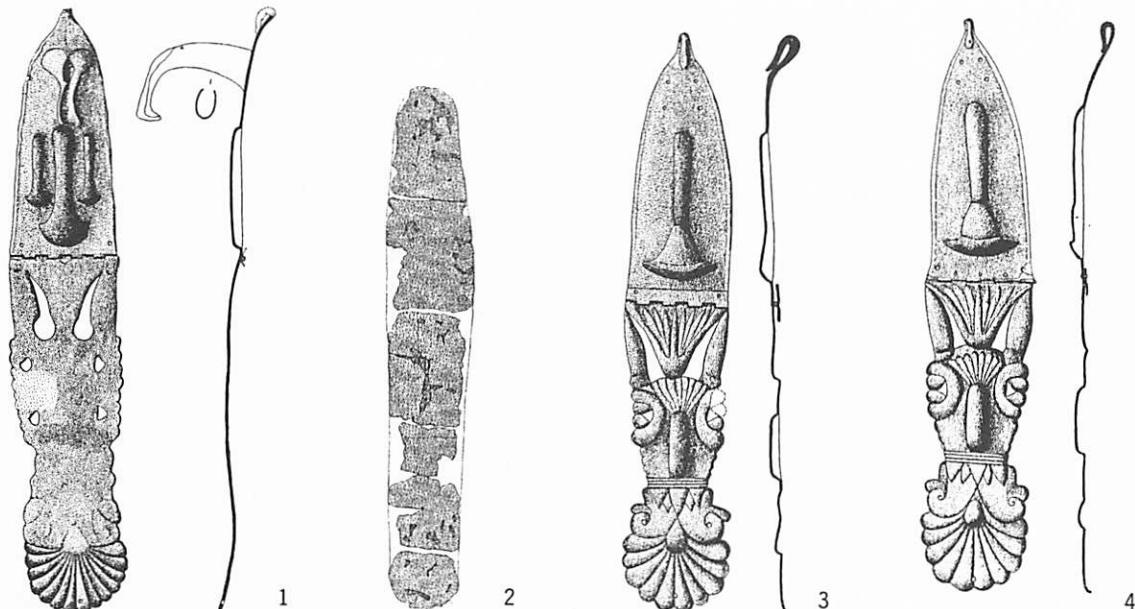


図7 サラミス出土例 (縮尺1/6)
(Karageorghis 1967, 1973)

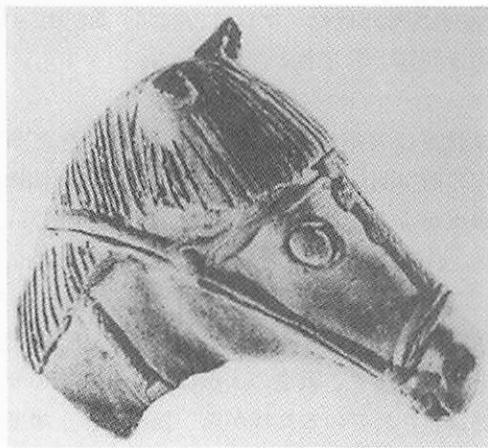


図8 メニコ出土馬像
(Crouwel and Tatton-Brown 1988)

なる。あるいは年代が下ると若干の形態変化があったのかかもしれない。

形態変化

上記の形態分類は次の2つのグループに大きく分けることができる。1つは台形を基本とした形態で、概して幅は比較的広い。Aグループと呼ぶことにする。これには外反台形、T字形、逆台形が含まれる。もう1つは細長い形態をなしている点で共通しており、概して細く、特に上端部は極端に狭い。Bグループと呼ぶことにする。中央部に縦方向の帯状打ち出しがあるものが多いのは、細長く折れやすいため強度をつけることを意図していると考えられる。これには台形、外反台形1、外反台形2、細長い楕円形が含まれる。年代の分かる資料も少なく、ある程度幅を持たせて考えるしかないが、Aグループは先行して出現しており、A、B両グループは年代的に前後すると言えそうである。あるいはAグループは前8世紀後半あたりから次第に使われなくなって行くが、Bグループはその後もしばらく継続して用いられたと言い換えて良い(図9参照)。

装着方法も若干異なる。Aグループでは、基本的には小孔の位置が上下端に限定されている。幅広い上端部は額革に、細い下端部は長さから判断して鼻梁革に繋げられていたと思われるが、比較的小柄な馬ならば鼻革に繋げるのも可能であろう。Bグループでは、細い上端部に2つの穿たれた小孔ないしは1つの環(吊手)があり、左右両サイドの中程に1つないし2つの小孔が穿たれているものが多い。アルトゥンテペより出土した青銅製馬頭像に描かれている細長い台形馬面の取り付け方やウラルトゥの銀製外反台形馬面から、上部は額革に繋げ、左右の引手風金具を通して頬革と鼻革を連結する辻金具に繋げていたと思われる(図10)。この場合、下端部に見られる連なった小孔はアル

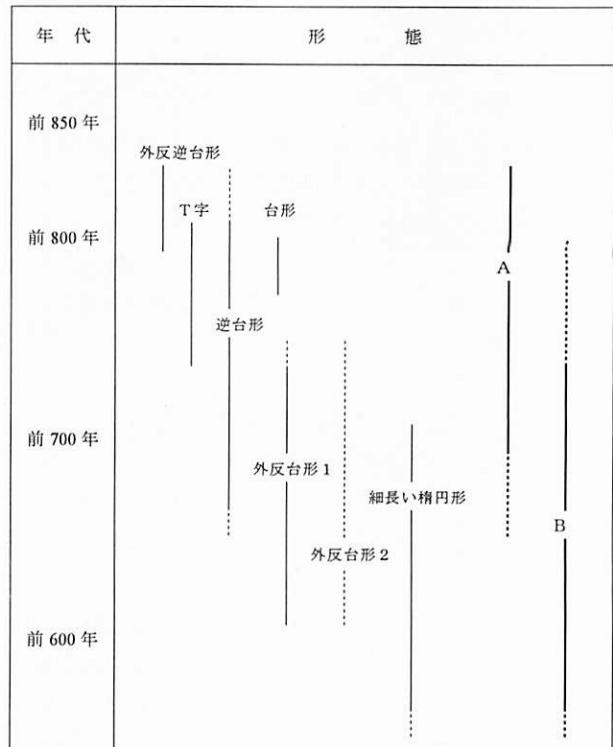


図9 西アジア馬面の編年

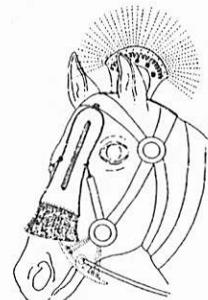


図10 装着想像図 (Özgen 1984)

トゥンテペ出土の青銅製馬頭像から判断して、房飾を取り付けるために穿たれたものと考えられる。サラミス出土例はその出土状況(図11参照)から装着方法が分かる。蝶番がちょうど目より少し上の位置にあることから、上半部の上端の吊手は項革に取り付けられていたと考えられている。上半部は頭部の形に合わせてやや湾曲しているのも理解できる。したがって下半部がちょうどBグループの他の馬面と同じ位置に来ることになる。またハッサンルでは、本来の馬面位置である額革中央部には円形金具があり、そのやや下、鼻先方向に台形馬面があることから、鼻梁革に繋げられていたと考えられる。装着する位置がAグループよりも鼻先方向にやや下がることがあったことを示す例であろう。

分布範囲を見れば、Aグループは地域的には西北部にほ



図11 サラミス2号墓出土状況
(Littauer and Karageorghis 1969)

ほぼ限定されている。ウラルトゥでは盛んに用いられていたのに対し、大国であったアッシリアにはその形跡がほとんど認められない。アッシリアの実物例であるニムルド出土の象牙製馬面も、描かれている図像から判断して、北シリアからの戦利品である可能性が高い。当時、両国は相拮抗し、対立関係にあったが、馬面におけるこの対照的な相違は興味深い。前9～前8世紀頃、馬面自体が西アジアではそれほど一般的ではなかったのかもしれない。ところが前7世紀に入ると、アッシリアのレリーフに馬面らしき描写が見られるようになることが象徴しているように、馬面は広がりを見せ、特にBグループは比較的広い範囲で用いられている。広がりを見せないAグループとは対照的にBグループはその分布範囲を広げていったようである。

変化の要因

前8世紀後半あたりでAグループからBグループへと次第に移行する、あるいは北シリアに集中されて行くAグループとは対照的に、広がりを見せるBグループが主流になって行くのはなぜであろうか。それを考える前に、馬面に対する筆者の理解をまず提示しておきたい。馬面を防具とする考え方があるのは理解しているところであるが、筆者はその視点だけで馬面を見ることには疑問を持っている。馬を攻撃する際、額部に限定されることはない。額以外でもいくつかの弱い箇所があり、そこを狙うであろう。また防具にしては小さすぎる例や薄すぎる例が、西アジアに限らず北アジアでも中国でも多数見受けられる。さらに、すでに述べたように逆台形の馬面には象牙製が多いのだが、このような脆い材質を用いること自体が不思議である。つまり防具として機能的に発展した形跡は認められず、む

しろ装飾的である点で終始一貫している。防具が必要なら、馬胃のような優れて機能的なものへと発展するはずである。実際、ハッサンルの焼失建物II(IVB層)からは青銅製の馬胃が出土しているのである(de Schauensee and Dyson 1983)。馬面を防具以外の視点でも見る必要があるう。

筆者はAグループに神像が描かれているものが多い点に注目したい。Aグループには勝利への祈念と神の加護を願い、邪悪な力から身を守る呪術的な意味が込められていたのではないだろうか。描かれている神像にティシェバ神やアスタルテ神が多いことは興味深い。ティシェバはウラルトゥの雷神・戦いの神であり、アスタルテもシリア土着の戦いの女神である。単なる飾りではなく馬の額に飾るに相応しい意味も有していたと考えたい。ウラルトゥの青銅器では、馬面以外で神像が描かれているものは車馬具に多い。轍の先端を飾っていた筒形飾金具、輶の扇形飾金具、戦車のボックスの側面に飾られていたと考えられる円形飾金具、馬の胸飾、首輪、戦士の兜、帶金具などが挙げられる。描かれている神像ではティシェバ神が圧倒的に多い。これらは戦車や馬・人物の要所、あるいは相手によく見える所とかに配置されているように見える。Aグループの馬面もそういった重要な個所の1つとして位置づけられていたのではないだろうか。

しかしBグループにはそうした意味合いが見受けにくい。少なくともAグループに比べてその意味合いは薄く、Aグループのような特異性は見られない。Bグループは面繫の中での単なる一装飾要素であると言えそうである。額部よりやや下がった位置で装着されたり、鼻梁部に合わせた細長い形態をなすこととも、呪術的な意味合いが薄れて位置が額部に定まらなくなつたためと解釈できる。額部に装着することに意味があったAグループとは対照的である。形態が異なれば装着方法も若干異なるのも当然であろう。何らかの理由で勝利の保証と邪悪なものから身を守るという呪術的な意味が薄れたために、馬面はその特別な地位を失い、次第に面繫の中での一装飾要素となって行ったのではないかと考える。馬自身が呪術性を失ったと述べているわけではなく、馬面に限ってその意味合いが薄れたと言っているに過ぎない。つまりAグループは消えて行くが、Bグループはその後も継続して用いられ、その分布範囲を広げてゆくことになったのであると。ところでI.メドヴェドスカヤは筆者分類のBグループに属する馬面を、鼻梁部を保護する機能的なもの(noseguard)と解釈しているが

(Medvedskaya 1988)、それほど機能的にとらえることに筆者はやや抵抗を感じている。すでに述べたように、防具として発展した形跡は見受けられないからである。あるいは鼻梁部の保護という意味合いも少しはあったのかもしれない。

ないが、第一義的なことは思えない。

馬面が呪術的な意味で重要視されなくなった原因に、スキタイを始めとする騎馬民族の影響が挙げられると筆者は考えている。騎馬民族の騎兵隊に、西アジアではそれまで主流であった歩兵・戦車部隊は、まったく歯が立たなかつたのである。前8世紀後半のことである。西アジアの諸国はこの現実に目をそむけるわけにはいかず、競うかのように新たな戦闘形態に相応するような軍隊に再編することになる。すなわち模倣から始めた騎兵隊への移行である。既成観念にとらわれることなく、一斉に騎兵隊を導入・編制したと考えられる。その際、馬面は呪術的な枠組みの変化を受け、その重要な位置を失ったのではないか。

呪術的な役割から装飾的な役割へと変化することで、馬面はより一般化し普及したと言える。あたかも重い意味を失うことで軽やかさを手にし、広まっていったかのようである。

註

- 1) 出土状況が明確でなく、上下逆の可能性は否定できない。その場合は逆台形に属することになる。また額部の円形金具とこの細長い台形金具を組み合わせて、馬面を形成していたと考えることもできる。
- 2) 基本的に細長く、しかも上部に吊手があり、下端部に小孔が連なっている。後の外反台形馬面に通ずる点が多い。

参考文献

- Barnett, R. D. 1957 *A Catalogue of the Nimrud Ivories with Other Examples of Ancient Near Eastern Ivories in the British Museum*. London, The British Museum.
- Curtis, J. 1988 *Bronzeworking Centres of Western Asia c. 1000–539 B.C.* London and New York, Kegan Paul International.
- Goff, C. 1969 Excavations at Baba Jan, 1967: Second Preliminary Report. *Iran* 7: 115–129.
- Crouwel, J. H. 1987 Chariot in Iron Age Cyprus. *Report of the Department of Antiquities Cyprus* 1987: 101–118.
- Crouwel, J. H. and V. Tatton-Brown 1988 Ridden Horses in Iron Age Cyprus. *Report of the Department of Antiquities Cyprus* 1988: 77–87.
- The Israel Museum 1991 *Urartu: A Metalworking Center in the First Millennium B.C.E.* Jerusalem, The Israel Museum.
- Karageorghis, V. 1967, 1970, 1973, 1974 *Excavations in the Necropolis of Salamis I, II, III, IV*. Cyprus, The Department of Antiquities Cyprus.
- Kantor, H. J. 1962 A Bronze Plaque with Relief Decoration from Tell Tainat. *Journal of Near Eastern Studies* 21/2: 93–121.
- Littauer, M. A. and V. Karageorghis 1969 Note on Prometopidia. *Archaeologischer Anzeiger* 2: 152–160.
- Littauer, M. A. and J. H. Crouwel 1979 *Wheeled Vehicles and Ridden Animals in the Ancient Near East*. Leiden and Köln, E. J. Brill.
- Medvedskaya, I. 1988 Who destroyed Hasanlu IV? *Iran* 26: 1–15.
- Moorey, P. R. S. 1971 *Catalogue of the Ancient Persian Bronzes in the Ashmolean Museum*. London, Oxford University Press.
- Özgen, E. 1984 The Urartian Chariot Reconsider: II Archaeological Evidence, 9th–7th centuries B.C. *Anatolica* 11: 91–154.
- Özgürç, T. 1961 Excavations at Altintepe. *Bulleten* 25: 269–290.
- Piotrovskii, B. B. 1955 *Karmir Blur III*. Erevan.
- de Schauensee, M. and R. H. Dyson Jr. 1983 Hasanlu Horse Trappings and Assyrian Reliefs. In P. H. Harper and H. Pittman (eds.), *Essays on Near Eastern Art and Archaeology in Honor of C. K. Wilkinson*, 59–77. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Sevin, V. 1978 A Comment on the Assyrian and Urartian Horse Trappings. *Anadolu Arastirmalari* 6: 111–129.
- Tanabe, K., A. Hori, T. Hayashi, S. Miyashita and K. Ishida 1982 Studies in the Urartian Bronze Objects from Japanese Collections (1). *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 4: 1–76.
- Tasyürek, O.A. 1975 Some Inscribed Urartian Bronze Armour. *Iraq* 37: 151–155.
- Young, R. S. 1962 The 1961 Campaign at Gordion. *American Journal of Archaeology* 66: 153–168.
- ギルシェマン, R. (新規矩男 翻訳監修) 1966 『古代イランの美術I』 新潮社。
- 巽 善信 1991a 「天理参考館蔵ウラルトゥの青銅製馬面をめぐって」『オリエント』34巻1号 94–104頁。
- 巽 善信 1991b 「天理参考館所蔵ルリストンの青銅製馬面」『天理参考館報』4号 121–126頁。
- 巽 善信 1995 「紀元前7世紀における西アジアの馬面」『オリエント』38巻2号 38–54頁。

巽 善信
天理大学附属 天理参考館
Yoshinobu TATSUMI
Tenri University Sankokan Museum